

★ 日本人ジャズ・ベーシストのパイオニア&名プロデューサー ★

中村照夫【Teruo Nakamura】

単身 NYへ渡ったのは1964年5月、22歳の時。69年にロイ・ヘインズ(ds)のバンドでプロ・デビューを果たし、73年に初リーダー作『ユニコーン』をリリース後、自身のバンド「ライジング・サン」を結成するやアルバムとシングルが全米チャートにランクインするという快挙を達成。そして、79年6月15日には日本人として初めてNYにある音楽の殿堂カーネギー・ホールに出演を果たす。ベーシストとだけでなく、プロデューサーとしても手腕を発揮し、2009年には自身の「チャー・レーベル」をスタートさせた。

この6月15日に自身初となるベスト盤、中村照夫ライジング・サンが残した76年から現在までのアルバムの中から厳選された10曲と新曲1曲を含む全11曲収録の『ホワット・イズ?』リリースを控える中、この日本人ジャズ・ベーシストのパイオニア&名プロデューサー、中村照夫とのインタビューが実現した。ご本人からたくさんの貴重な写真もご提供頂き感謝&感激でした。

【2011年5月 取材&文：加瀬正之／取材協力：大泉文彦（ポニーキャニオン）】

●ベスト・アルバムのリリースに際して、現在の心境をお聞かせ下さい。

最初はコンピレーションのリリースには興味が全くありませんでした。私にとっては過去に演奏をした物ですから。A&Rの大泉さんから今迄の長い活動の1つの区切りとして、キャリアを1枚で俯瞰できるようなアルバムを作りたいと希望され、それなら新録音も含むベスト・アルバムとしてリリースしようという事になったのです。

●収録曲はどのようにして選ばれたのですか？

各アルバムの中で最もインパクトのある曲を選びました。ずっと完成させたいと思っていた「レス・イズ・モア」という新曲も12人のメンバーが参加して録音しました。チャー・レーベルでユニークな事の1つは、デザイナーの増田高嗣さんの素晴らしいアートワークデザインと、私がずっと撮り続けてきた今となっては貴重な写真を、ジャケットやブックレットの中で取り上げていることがあります。今回のベストでも当時のレコーディングや様々な時期のステージの模様など、沢山の写真を見てもらえます。

●ベスト・アルバムのリリース記念として中村照夫ライジング・サンのライブの予定はありますか？ また、中村照夫ライジング・サンの今後の活動について教えてください。

ライブをやって欲しいというリクエストは以前からありますが、現実には未だ決まっていません。去年はメキシコにツアーをしたり、ブルーノートニューヨークに出たり、最近ではドラマーのブライアン・ブレイクと新しいバンドを作るためにリハーサルを始めました。ピアニストのアルトウーロ・オファレルやマイケル・ウルフ等とリハーサルをやっています。将来、日本にツアーする機会があれば、昔から一緒にやっていた森土郎も参加する事になります。

●中村さんが渡米された頃を振り返って、今現在どのようなお気持ちですか？

音楽が聴きたくてニューヨークに来ました。当時は特別にやらなければいけない事も無かったし、目的も無かった。ニューヨークに居ついて、好きな音楽を始め、そのうちにプロの音楽家になった。アメリカでは貴重な体験をしてきました。スタンリー・タレンタインのバンドに参加していた頃は、今日も明日も関係なく音楽を毎日のように演奏していて、あのバンドで演奏出来たのは最高に幸せな経験でした。一緒に演奏していたブルーノ・カーのドラミングは本当にすごかった。ちょっと経験出来ないような体験をしてきたんだと思います。バードランドでバド・パウエルにサインを貰ったこともある。雪の降るグリニッチヴィレッジのジャズクラブで、ポール・チェンバースとマッコイ・タイナーのデュエットを聴いた時は観客は私とパートナーの2人だけ、でも、その演奏は最高でした。家に帰りマイルスと演奏をしているポールのライブコードをかけてみると、その夜もまったく同じレベルのセッションで演奏をしていた事がよくわかりました。

●60～70年代の頃と現在のジャズ・シーンで感じる違いや変化についてお聞かせ下さい。

60年代や80年代まではジャズを演奏出来るクラブや場所が沢山あって、ミュージシャンも時計を見ながら仕事をするような事はしなかった。私がロイ・ヘインズのバンドでブルックリンのブルーコロネットと言うクラブに出ていた時は夜9時ごろから朝



Photo: Kenji Takigami

の4時半ぐらいまで、時には4～5セットやっていた。毎回、1時間以上のセットは当たり前だった。80年代にアップタウンのマケルスでも4セットは演奏していた。ステージを沢山こなすという事は、演奏をめいっぱい実践する機会があるということで、そこで色々なアイデアを試したり見つけたりする事ができた。だから、当時のミュージシャンは今日と比べると演奏の仕方やアイデアも違うし、音楽がとてもイノベティブだったと思う。

●中村さんにとって一番思い出深いご自身のアルバムと、中村さんがジャズに興味を持つきっかけとなったアルバムがあればお聞かせ下さい。

思い出深いのはやはり『ライジング・サン』だと思う。あの録音の時は特別なゾーンに皆が入っていた。日本で大学に行っていた頃は結構ジャズ喫茶にいて色々なジャズを聴いていたけれど、ドナルド・バードの『フェゴ』とか、ソニー・クラークの『クール・ストラッティン』、ニーナ・シモンの『ニューポート』、ポール・チェンバースの『ベース・オン・トップ』なんかが好きだった。

●中村さんにとって一番思い出深い（ご自身の）ライブについてお聞かせ下さい。

スタンリー・タレンタインのバンドでドラマー、ブルーノ・カーと一緒にツアーをしていた時は凄かった。当時は年間300日というスケジュールで全米をツアーしていたんだ。

●中村さんの愛用のベース（アコースティックとエレキ両方）について教えてください。

メインのアコースティックベースはタイロリアン製のベースでニューヨークの天才ベースリペアマン、ビル・マーチャント氏がメンテナンスをしてくれて、Cのエクステンション付き（ロン・カーターが使っているのと同じ）でピックアップはフルサークルを使っています。ベースギターはESP社製のカスタム5弦ベース、もう一本はヤマハの5弦ベースでモデルの名前はB.B.Limited。70年代後半、まだ日本製は安かろう、悪かろうの時代にヤマハのベースBBシリーズの誕生に協力しました。この楽器は未だに



NY ブルーコロネットでのロイ・ヘインズとの貴重なショット！

Photo courtesy: Teruo Nakamura

沢山の人が持っていて、ポール・マッカートニーも弾いていたと聞きました。その頃日本で作られたベースはデザインもフェンダー風、音もフェンダーのコピーという感じでした。当時ヤマハのベースをデザインしていた人が、私のロフトに楽器を持って相談にやって来ました。持ってきた楽器の塗装やルックスもあまり良くなかったので、「ヤマハは良いピアノを作っているのだから、ピアノの塗装をそのままベースに使えば面白い。」というアイデアを出しました。さらにベグの色は金色のピアノのヒンジ、ブリッジも金のピアノのヒンジの色にして、塗装が黒でヒンジが金を使った独特のヤマハのベース BB が誕生したのです。それからベースの重さを、もう少し軽くするようにともアドバイスしました。その結果、BB シリーズはミッドレンジがしっかり出る楽器になったという訳です。

●ライナーノートの中で特別な思いがあり、尊敬するジャズマンとしてロイ・ヘインズ (ds) とスタンリー・タレンタイン (ts) の名を挙げられていますが、中村さんがこの人は凄いと思ったジャズ・ベーシストは誰ですか？

やはりポール・チェンバースですね。彼が亡くなったときはお葬式に行きました。沢山の人が来ていて、教会の周りも人でいっぱいでした。とても中に入れそうもないので暫くその場所にいたけれど、結局中に入るのは諦めて帰ったのを憶えています。あまり有名ではありませんが、カーメン・マクレエのサン・フランシスコでのアルバム『ライブ・アット・シュガーヒル』でも弾いていたビクター・スプロールスも良かった、この録音と同時期のカーメンのライブをロスのシェリー・マン・ホールで見たのも懐かしい。サム・ジョーンズのベースも好きでした。

●中村さんは本誌由来の Leroy Vinnegar とも親しくされていましたが、Leroy さんとの特別な思い出があればぜひお聞かせ下さい。

「リロイ・ヴィネガーのベースは 64 年にアメリカに来る前からレコードで知っていました。スタンリーのツアーでロスに行ったときに確かホモ・サビーチにあった“コンサート・バイ・ザ・シー”で演奏をしているときにお会いしたのだと思います。私がプロデュースした菅野邦彦さんのアルバム『エスターテ』で演奏をしていますし、ジョー・リー・ウィルソンの『ザ・シャドー』でも演



NY タウンホール、スタンリーとバリーと

Photo: Tommy Yoshizawa

奏してもらいましたよ。リロイは「ベースは伴奏の楽器である。」という姿勢に徹していた人です。私の知る限りでは、彼はウォーキングベースソロしかやらなかったベーシストですね。

●今後のレコーディングやリリース予定など、チータ・レーベルでの活動についてお聞かせ下さい。

バリー・フィナティのアルバム『2B Named Later』をリリースする事にしています。ポップ・ミンツァーのビッグバンドのアルバム『Papa Lips』や、レーベルのコンピレーションも出す予定にしています。

●レッド・シューズ・ファンデーションの今後の活動についてお聞かせ下さい。

14 年続けたエイズ・アウェアネスの公演は経済的な理由で暫くお休みですが、今年もセントラルパークでエイズ・ウォークが行なわれ 4 万 5 千人もの人がウォーキングに参加しています。エイズという病は決して下火にはなっていません。

●中村さんご自身のリーダー・アルバムのレコーディング予定はありますか？

今回リリースするベスト『What is?』の 1 曲目は森士郎の書いた「レス・イズ・モア」という曲で、これは今年の 4 月までレコーディングしていた私の最新の録音作品になります。この先にまた新作を録音する事にしています。

●中村さんの夢、今後実現してみたいことについてお聞かせ下さい。

今回の私のアルバムでチータの作品は 12 枚になりました。スティヴ・グロスマン、ポップ・ミンツァー、オナージェ・アラン・ガムスといったメンバーと日本で演奏が出来るといいなあと思っています。この先リリースする予定のバリー・フィナティも、日本で演奏する機会が出来れば良いなあと思っています。

●最後に中村さんのようにこれから世界を目指す若いアーティストたちへメッセージをお願いします。

好きこそ、物の上手なれ。

【チータ・レーベル・オフィシャル・サイト】

<http://www.cheetahjazz.com/>

中村照夫の全貌を掴む初のベスト・アルバム！



ホワット・イズ？

中村照夫ライジング・サン

チータ・レーベル : PCCY-30189

¥2,500 (tax in)

2011.6.15 In Stores!



チャギー・カーター&リロイ・ヴィネガーとの貴重なショット！

Photo: Arnold Hinton